

『みんなの図書館』2018年6月号（図書館問題研究会 2018年5月10日発行）

周南市立徳山駅前図書館の概況 ——5番目のツタヤ図書館

図書館友の会山口県連絡会 藤村 聡

新徳山駅ビルにカルチュア・コンビニエンス・クラブ(CCC)が指定管理者になる5館目の通称「ツタヤ図書館」が周南市立徳山駅前図書館として2月3日に開館した。1ヶ月半余り経過した時点での概況を報告しておこう。

地元紙「日刊新周南」(3月7日)に「新徳山駅ビル目標上回るペース 1ヶ月の入館23万人超に」と報道された。だが鉄骨造りの建物1階から3階までのセキュリティゲート(BDS)11か所(設置費3300万円)でカウントされる入館者数の実人数は多くても半分以下であろう。

昨年12月議会での共産党議員の一般質問に教育長は「入館者数は賑わい交流施設全体の述べ人数で利用状況の指標」と答弁していた。しかし、報道ではこの水増しの入館者数が独り歩きしているわけである。私もこれまでに5回(午前2回、午後2回、夜間1回)行って見たが、少なくとも20人以上にカウントされているはずだ。

周南市のHPにアップされている館内マップで図書館と蔦谷書店&スターバックスの位置を読後に確認していただきたい。

新駅ビルの述べ床面積は約5300㎡、うち図書館は2400㎡だが、既設のツタヤ図書館と同様にメインの1階はツタヤ&スタバ、2階も駅通路側をツタヤが占めており、階段傍の約1千万円を投じたアート高層書架の前はもちろんツタヤで、そのインテリアとなっている。約55億円の巨費で整備された施設設備の入口には1階・2階共に「周南市立駅前図書館」と掲示されているにもかかわらず、年間1億5千万円という多額の指定管理料を支払いながら、ツタヤ&スタバに格安の使用料(市は通常月1150円/㎡)で図書館内の目的外使用を認め、地元業者を差し置いて大々的に商売させているのである。開館日の直前に徳山駅近くにあった老舗の地元書店・鳳鳴館が閉店したのは誠に無念であった。

地元木材を多用し南北壁面総ガラスの館内は、確かに明るく都会的でオシャレな雰囲気的空間になっており、若者中心に幅広い年齢層の来館者で賑わっている。だが最初の10日間で10万人以上の入館者と報道されていた頃に比べると、ウィークデイは既に午前・午後共にそれほど多くはない。夜間は7時を過ぎるとスタバでさえ客は少なく、3階の閲覧席だけが自習の高校生で埋められている。土曜日午後はまだ賑わっているものの、1年くらい経って珍しさが過ぎてしまうと減少していくのであろう。

また、新駅ビル内と街中のギャップが甚だしく、おそらく商店街に流れて行く客は無い

のではと思われる。中心市街地もイベントなどを企画したりしてはいるが、ある市議員はイベントに来た人が駅ビルに入ることはあっても逆は難しく、そのうちに費用対効果の問題がクローズアップされる事態になろうと批判していた。

図書館には6万冊と公表される図書が表紙見せ展示をふんだんに用いながら配架されている。準備期間に約1億3千万円を購入する選書は、市内既存の図書館職員4人がチェックしたという、指定管理者制度としてはあり得ない教育長答弁(昨12月)も事実あり得た。蔵書構成は主に料理、旅行、スポーツ、ファッション、アート関係などカラフルでビジュアルな実用書が中心で、他の分野も少量ずつ購入されているが、29種類の特殊なツタヤ分類ではやはり配架が分かり難い。蔵書検索も棚番号と配架図でプリントするなど、図書館運営と書店経営の混同をまだ継続しているのである。来年度からは年間450万円の図書費予算しかなく、3年も経つと蔵書の魅力が落ちていくのではと懸念される。また天井までの高書架上部に並ぶ約150万円かけたダミー本も着実に色あせていくのだろう。

全館でスタバなども含め座席数が約550席あり、コーヒーを飲みながら雑誌や図書が読めるという宣伝文句もあって、入館者は閲覧利用が多く、図書館の貸出利用は少ないように見受けられる。ツタヤにはもちろんマガジンストリートがあり、新刊書が平積みされているが、図書館の新着図書の棚には新刊書ではなく新規受入れの図書が並べられ、雑誌コーナーも無く新聞コーナーだけで、明らかにビジネス優先なのだ。

図書館カウンター前には最初こそ利用登録するとスタバのミニコーヒーがサービスされるので、行列ができていたがその後はこの光景も無い。図書館部分も書店の延長の雰囲気であり、書棚を探すか近くの席で読むかどちらかの様子だ。キッズライブラリーも駅通路を挟んで離れており、児童書もごく少数のためか、ウィークデイは親子連れの利用も少ないようだし、もちろん夜間の利用は極くわずかである。

図書館長は賑わい交流施設長と兼務のCCC部長。職員は副館長1人、社員5人、アルバイト29人。アルバイト・パート募集には司書は時給900円～、資格なしは時給860円～となっていたが、年中無休の開館日、夜10時までの開館時間に対応するシフト制の勤務は厳しいものがあるだろう。しかも、既設のツタヤ図書館と同様に書店員を兼務なのだ。どのように指定管理の図書館業務と書店業務とを切り替えるのか、また、賃金もどう支払われるのか不確かであるし、図書館にとって最も重要な長期的な人材育成などももちろん困難になるだろう。参考図書や書庫も無くレファレンス対応などは、駅から700mと近い市立中央図書館にお任せになるだろう。

要するに、市立駅前図書館とは看板だけの商業観光施設として設置され、商店街への利

用客の回遊を期待されているのだが、借り物のミニ東京に頼るのではなく、マイ地域に根差し特性を生かした地道な努力がなければ、中心市街地の活性化は至難であり持続もしないと想われる。最初から教育文化施設とは位置付けられてない、ツタヤ&スタバ付属の言わばビジネスモデル図書館であり、Tカード使用はじめCCC主導のまさに商業ペースの管理運営がなされている実態が実感された。館内でのイベントなども図書館のPRより販促宣伝のためなのは、高額の内装と共通であろう。

無料原則をうたう図書館法はもちろん、指定管理者制度の趣旨をも逸脱した、文字どおり異次元の偽装図書館と言えよう。市内の既存5図書館への影響は無論のこと、県内の他市町図書館への影響もどうなっていくのか大いに危惧される。

私どもの「図書館友の会山口県連絡会」としても2013年秋に問題が発生して以来、「図書館を学ぶ会」を5回、周南市長部局や教育委員会への要請活動5回などを重ねてきたが、貸出に伴うTポイント付与を阻止できた以外は着々と事業を進められてしまった。「山口県オンブズマン市民会議」による図書館計画の賛否を問う住民投票条例制定を求める署名運動なども起こったものの、議会多数派に否決されて以降は組織的な反対表明の動きも無く、市議会一般質問で質している実状で残念極まりない。

先述した巨額の費用対実際の効果や不透明な指定管理料と営業経費、誇大宣伝とビジネス優先の管理運営実態、何よりも図書館としての諸々の問題点など、今後とも市民や議員と連携しながら、当事業の推移をしっかりと注視しチェックしていきたいと考えている。

また「図書館友の会全国連絡会」のプロジェクト・チームが1月に発行したパンフ『「ツタヤ図書館」の“いま”—公共図書館の基本ってなんだ?』改訂版を、周南市当局はもちろん、地元マスコミをはじめ、県内図書館協議会や図書館友の会メンバーほかに配布している。図書館の基本を無視したツタヤ図書館に対する問題意識をもっと広げていかなくてはなるまい。

これからも種々の情報提供などご協力をよろしくお願いしたい。